

Information

第27回講演会・第20回教育研究発表会を開催します！

◆第27回講演会 第20回教育研究発表会

日時 平成19年11月10日(土)
会場 岡山コンベンションセンター3F
(岡山市駅元町14-1)
<http://www.mamakari.net>

講演会 13:30~14:50

講師 菅原文太氏
演題 「岡山県の友人たち」



教育研究発表会 15:00~17:00

・小中高の教育実践の今を12団体が1項目7分で発表

申込方法

お電話またはメールで参加申込書をご請求ください。
折り返しこちらから参加申込書をお送りさせていただきます。

- 電話 086-221-5254 (財団直通)
- メールアドレス eczaidan@fukutake.or.jp

当財団HPから参加申込書をダウンロードし、財団事務局までFAXまたは郵送でお送りください。

- HPアドレス <http://www.fukutake.or.jp>

平成20年度 教育研究助成・文化活動助成の募集を開始します！

教育研究助成

対象 岡山県内の学校園に所属する教育関係者、及びその地域、保護者の方々。
 上限額 学校園全体の取り組みについては50万円、個人またはグループについては20万円。
 応募方法 学校園または市町村教育委員会等へ配布予定(11月1日)の募集要項をご覧ください、所定の申請書(財団HPからダウンロード可能)に必要事項を記入の上、当財団事務局宛に郵送。
 応募期間 11月15日(木)から1月31日(木)【必着】

文化活動助成

対象 岡山県内で文化活動を行っている個人・団体(原則として社会人)。ただし、学術研究や単なる趣味や同好の活動・調査は除く。
 上限額 原則上限30万円。
 応募方法 市町村教育委員会等へ配布予定(2月1日)の募集要項をご覧ください、所定の申請書(財団HPからダウンロード可能)に必要事項を記入の上、当財団事務局宛に郵送。
 応募期間 2月15日(金)から4月30日(水)【必着】

詳しくは11月15日配布予定の募集要項をご覧ください。

※注意 教育研究助成、文化活動助成ともに今年度より応募期間を変更しておりますので、ご注意ください!!

財団法人福武教育文化振興財団 助成先の活動

◆第24回「外国人による日本語弁論大会」

開催日 平成19年11月18日(日)
会場 岡山国際交流センター

◆「NHK交響楽団定期演奏会第11回公演」

開催日 平成20年1月27日(日)
会場 岡山シンフォニーホール

■公開している教育機関

◆个性的教育を推進する地区・校助成(開催校、開催日)

- ・岡山県立和気閑谷高等学校 11月2日(金)
- ・岡山県立水島工業高等学校 11月22日(木)
- ・小田郡矢掛町 平成20年1月23日(水)

◆英語教育重点地区・校助成(開催校、開催日)

- ・岡山学芸館高等学校 11月14日(水)
- ・岡山県立岡山城東高等学校 11月21日(水)
- ・香川県直島町 直島中学校・直島小学校・直島幼児学園 11月22日(木)

F U E K I



唐子踊り(瀬戸内市)

F U E K I 不易
vol.28

[特集]

新しい職業教育に

挑む

～オーストラリア
TAFE視察に向けて～

—未来まで響け トランペット、夢乗せて—

今回は平成19年度の谷口澄夫教育奨励賞を受賞されたトランペット鼓隊「ブルースカイ ブルー NISHIYAMA」のある西山小学校を訪ねた。この小さなトランペット鼓隊は音楽コンクールで受賞したわけではない。しかし、地域から最も愛され支持されている音楽隊なのである。そして、それが今回推薦された理由の一つとなっている。

通常は高梁市から新成羽川ダムの貯水湖「備中湖」沿いに山道を登るルートなのだが今回はそのルートで崖崩れが発生し通行不能との情報を得た。そこで、大きく迂回し「北房」経由広島県の「東城」で高速を降りる。少し東へ戻り「野馳」から南進し標高530メートルの西山小学校に到達した。小高い丘から周囲を見回すと遙かに繋がる吉備高原の青い峰、そして彼方に中国山地が続いている。

そんな美しく豊かな自然環境の中に「高梁市立西山小学校」はあった。訪問したのは二学期が卒業して早々の9月5日の昼下がりがだったが、既に給食が開始され、午後も授業体制であった。現在の全校児童数は12人、複式3学級という少規模校である。そのトランペット鼓隊は全児童と教職員全員で編成されているが、休日などの活動の際は卒業生の中学生も参加し、より幅広い音を出しているという。結成は平成4年にさかのぼり既に十五年の歴史がある。1・2年生は打楽器担当だが、2年生の終わりからトランペットの練習を開始し、

「高梁市立西山小学校」を

訪ねて



3年生でトランペットを正式に担当する。訪問した日には、合唱「ビリーブ」に始まり「千の風になって」「勇気100%」の練習を汗びっしょりで演奏していた。

練習は水曜日以外の朝の音楽活動の10分間と週1回の全校音楽授業の時間に行い、高学年の児童が低学年の児童に優しく指導したり励ましたりしながら練習しているそうである。入学式、運動会、学習発表会、卒業式などの学校行事だけでなく、福祉祭り、夏祭り、ふるさと祭り、福祉施設の訪問等、地域の行事に多数招かれ参加している。多い月には2度くらい出かけることもあるという。平均月に1度程度は、いろいろな地域からの要請で演奏に出かけ、活気と魅力ある演奏で地域づくりに大きく貢献している。

赤木校長先生によれば、この活動に参加することは、2つの大きな自信につながっているそうだ。1つ目はトランペットが演奏できる自信。2つ目は人前で堂々と意見が言える自信だそうである。しかし、何よりも大切なことは毎日が楽しい学校であることだそうだ。

西山小学校はこの目標のもとに先生方全員が結集されている素晴らしい学校であった。

この地域に根付き、愛されている小音楽隊が、いつまでも地域に夢と希望を与え、心に響くトランペットの音色を奏でてくれると信じつつ西山小学校を後にした。(財団・赤松康弘)



地域づくりを支援 テレビ2局が競演

より良い地域づくりを支援している福武教育文化振興財団では、今年度岡山県内で文化活動を展開している81団体に対して総額1485万円の「文化活動助成」をしましたが、その中からテレビ局に二つの団体を選んでいただき、その活動振りを紹介する番組制作を依頼しました。

「アートは人を元気にさせる！」

犬島の芸術祭（TSC制作）



番組のテーマは過疎化した島で、文化を媒体とするコミュニケーションの再構築はなるのか？というもの。岡山市犬島を舞台に、青地大輔さんを中心とする若き芸術家たちで組織する「犬

島時間実行委員会」の人たちや現代アートと交流する島の人々を追うドキュメンタリー番組。

7月28日、「犬島時間」のイベントが始まると次から次へと見学者が上陸してきた。若い人たちが家族連れ。訪れた合計人数は1221人。島の人口の20倍にまで膨れ上がった。「島のキャパを超えてしまう来場者に、うれしい半面、もっとも伝えたい、見せたいものが隠れてしまったのでは…」と青地さん。一方「現代アートはわからん。」「人が多すぎて外に出られん。」非日常的な時間に戸惑う島の人たちの姿も見られた。番組は9日間にわたって繰り広げられたアートフェスティバルを中心に、途中襲ってきた台風5号などのアクシデントも盛り込みながら撮影され完成した。

今回の取材を通して犬島の平均年齢78.2歳、64名が暮らす島の実態を知り、これからの島のあり方に心が動いた。来春には島の美術館が開館する。新しい犬島時間が始まる。これから進化していく犬島か

玉堂琴譜に魅せられて 犬島はあつかった！

ら目が離せない。番組は8月18日(土)14:00~14:30放送、9月17日(月)11:25~11:55に再放送された。(リポート 財団・和田広子)

RSKは「よみがえる調べ ～玉堂七弦琴の世界～」(仮題)

この秋、岡山後楽園で「七絃琴」のコンサートが開かれた。「七絃琴」は中国3千年の歴史を持ち、孔子も演奏したといわれる楽器。「琴線に触れる」という言葉があるように、心に響く音色を持つとされ、世界無形遺産に指定されている。七絃琴の演奏にあたった坂田進一さんは、日本の数少ない奏者の一人。東京で「坂田古典音楽研究所」を主宰する。坂田さんは、若いころから江戸後期を代表する文人画家・浦上玉堂に心酔し、玉堂の研究に没頭した。

玉堂は、独特な味わいを持つ水墨画を数々残した画家として知られるが、好んでその画に「玉堂琴士」と署名している。寛政6年、50歳で池田鴨方藩を出家した玉堂は76歳で没するまで、武士としての一切の制約から解き放たれ、七弦琴を愛し、多くの琴譜も残した。

代々雅楽の免許を司る家系に育った坂田進一さんは、その「玉堂琴譜」を元に当時の音色を復元、東京の湯島聖堂で「浦上玉堂の詩と音楽」という講座を開き、その魅力を説いている。

岡山に生まれ、独自の世界に生きた浦上玉堂。玉堂の世界に魅せられその音色の復元を目指す坂田進一さん。2人の世界が交錯した岡山の秋……。番組では、坂田さんの奏でる七絃琴の響きに乗せ、玉堂の残した画、書、楽器なども紹介し、その純粋で風雅な世界に迫る。放送日は未定だが、年末か正月の特別番組として放送予定。(ディレクター・石田公子)



Cover Photograph



朝鮮通信使400年 -唐子踊りルーツ考-

徳川家康の要請を受けて第一次朝鮮通信使の一行が対馬、下関、瀬戸内海を経て江戸にその第一歩を記したのが1607年、400年前のことであった。「通信使」とは〈信(よしみ)を通(通わす)使(つakai)〉という意味で、1811年までの間に12回来訪し、日本と朝鮮の文化交流に画期的な成果をもたらせた。今年は400周年を記念する行事が日韓各地で開催され、寄港地の一つ牛窓港(瀬戸内市)をはじめ岡山、倉敷、備前などでも記念行事が予定されている。

牛窓に伝わる「唐子踊り」がこの朝鮮通信使による文化交流をルーツとする説がある。その衣装、童子舞、3拍子のはやし方などが李朝文化を伝えていると見る見解である。しかし「唐子踊り」は10月28日(日)、記念行事は11月10日(土)～11日(日)と別々に開かれ、担当者の意識も別々のものと認識している。昔から伝わる祭りとして新しくつくられた祭りの心は通いあわないのだろうか。

Editor's comments

何事も初体験というのは不安なものです。「不易」のスタイルを9年ぶりに全面リニューアルして世に送り出し審査を受ける。人々の目が深く注がれ、リニューアル第1号が小刻みに震える一そんな感触に襲われています。

「不易」は財団の機関誌として、1998年5月22日にA4版4ページで産声を上げ、2年後にカラー化され、そのままのスタイルで前回の27号まで続いてきました。「不易」というタイトルは、初代理事長の谷口澄夫先生が芭蕉の去来抄から名付けたもので、その中で谷口先生は「『蕉門に千歳不易の句、一時流行の句と云有り。某元は一つなり。不易を知らざれば基たちがたく、流行を知らざれば風新たならず』というの戒めがあります。社会の変転に右顧左眄することのないよう自らの戒めとしたい。」と財団の依って立つべき基本理念のあり方を述べられています。

新スタイルの「季刊一不易」は、職員の全てが取材、編集に関わり、教育、文化を通してより良い地域づくりに取り組む人々を支援していくという財団の基本理念を貫きたいと願っています。後に続くものとして形は変化させても、その心は受け継いでいくと自らを戒めながら……

季刊

不易

F U E K I vol.28 2007.10.15

財団法人 福武教育文化振興財団

〒700-0807 岡山市南方3-7-17
TEL 086-221-5254 FAX 086-232-3190
http://www.fukutake.or.jp/

制作 株式会社 吉備人

デザイン 田中健一郎(QUA DESIGN style)

■日本のキャリア教育

先進諸外国では義務教育終了までにキャリア教育が行われていますが、日本でも最近になってその重要性が説かれ、小中学校での職場体験やコミュニケーション能力を高めるための教育、専門学科高校でのスペシャリスト育成教育、またニートやフリーターを対象とした職業教育対策にも目が向けられるようになってきました。日本のキャリア教育が遅れた大きな理由は、終身雇用制によって職場での人材育成が行われてきた社会システムが崩壊し、さらに家庭や地域での教育力が落ちたことなどが上げられています。

キャリア教育に対する学校現場での取り組みはまだ著についたばかりで、自分自身の進路を見出し、自らの力で人生を切り開く意識を沸き立たせるまでには至ってなく、さらに偏差値では推し量れない子どもの可能性を引き出すための教育とどう取り組むかについての方策にまでは、まだ道遠しの感さえします。

■オーストラリアのキャリア教育

こうした現状の中で、オーストラリアで行われている公立の職業専門学校・TAFE (Technical and Further Education)の教育が注目を集めています。オーストラリアには230を超えるTAFEキャンパスがあり、世界各地から1万8000人に及ぶ留学生が学んでいます。そしてことし、岡山の高校生を中心に留学生を受け入れるGCA(Global Career Academy)がシドニーに創設され、募集を始めました。



GCAはシドニー最大のTAFE NSI (Northern Sydney Institute)と提携し、留学生が授業に必要な英語力を身に付けた後、NSIの7つのカレッジで開講している100以上のコースの中から職種を選択し、深く学べるシステムを構築しています。

福武教育文化振興財団では、日本ではまだ実現していないこの教育システムに着目し10月20～27日まで、岡山県下の小中高校の教諭ら25人の視察団を編成、



挑 新
挑 しい
挑 職業
挑 教育
挑 に
挑 む

オーストラリア
TAFE視察に向けて

それぞれの立場で研究していただく場を設定致しました。次号では視察を踏まえ、GCAとTAFEの充実した実態などについて詳しくご報告する予定です。(財団・下山宏昭)

■TAFEレポート

シドニー市街地から北西へ車で約30分、TAFEライドカレッジに到着する。緑の深い匂いとみずみずしい空気、日本では聞き慣れない鳥たちのさえずりが響く。静かな池を取り囲む庭園や、様々な種類のユーカリの林を抜けると、学生が集うカフェや研究棟を取り囲む広大な芝生の広場に出た。さらに坂を上るとゴルフのバンカーやグリーンがあり、右手にはホテルのような建物が見える。これらのすべての施設と環境が1つのカレッジという。ホテルのような建物は、実際のホテルとして営業しており、客室は勿論、レストランやバーもあり、利用客で賑わっていた。フロントや食事のサービスをするスタッフのすべてが学生であり、通り抜けた庭園や林、芝に至るまで学習の場だったことにも驚いた。TAFEが目指す「実社会のニーズに直結した実践的専門教育」とはこういうものなのだ実感した瞬間であった。

今、オーストラリアにおける教育産業は「第4の輸出産業」と位置づけられ、安全で暮らしやすい環境に加えて、留学生を保護する国家法さえ整備されている。このオーストラリアのTAFEこそ、日本の若者がそれぞれのキャリアに即した感性と英語を学び、世界で通用するプロになるための場として最良の機関であるという思いを深めた。

福武教育文化振興財団主催の今回の視察が実り多いものになるよう願っている。(GCA岡山事務局・山本由香)

